## 災害情報の再帰性に関する文化人類学的研究 : 高知市沿岸部の三地区の事例から

酒井貴広

本発表は、発表者が 2017 年 3 月から聞き取り調査を実施している、高知市沿岸部の浦戸湾内に位置する浦戸 (Urado)・長浜(Nagahama)・御畳瀬(Mimase)の三地区の住民たちの語りをデータとして、将来この地を襲うと 予測されている南海トラフ地震に関する諸情報が、地域の人々の心意や言説にいかなる影響を与えつつあるかを 明らかにするものである。

発表者は2011年8月から足掛け7年の間、高知県下の各地で民俗事象「犬神」にまつわる聞き取りを実施し、この調査過程で副次的に南海トラフ地震への予測と不安が入り混じった語りを得た。インフォーマントたちの語りを端的にまとめると、昭和21(1946)年に発生した昭和南海地震の体験や記憶と、近年高知県外で発生した阪神・淡路大地震、あるいは東日本大震災の情報が混ぜ合わされ、「将来高知県を襲う巨大な南海トラフ地震」とも表現すべき、実体のない災害への「予感」——不安と恐れを帯びた心意——を抱きつつあると指摘できる。

上記「予感」の現況を分析するため、発表者は高知県中央の浦戸湾西岸に位置する浦戸・長浜・御畳瀬の三地区に着目する。この三地区は南から北へ(1)浦戸、(2)長浜、(3)御畳瀬の順に位置しており、南海トラフ地震が発生した際には南の浦戸から津波の被害に遭うとされている。しかし、地理的な特徴に着目する防災研究の指摘とは裏腹に、当該地区の住民たちが語る「予感」は多様であり、自然科学を主軸とする包括的な防災研究の蓄積に加え、研究者が地域住民個々人に顔の見える距離から向き合う防災・減災の試みが必要である。

この試みの一端として発表者の聞き取りから得られたデータを提示すると、最も早く津波が到達する浦戸地区のインフォーマントの中にさえ、浦戸地区の海抜が比較的高いこと、昭和南海地震を含む諸災害で浦戸地区まで浸水した経験が少ないこと、発災時の避難路が整備されていることを根拠に、南海トラフ地震の被害をやや楽観視する者もみられる。一方、長浜地区は津波の到達まで浦戸地区より時間的な余裕があるにも関わらず、避難路や避難場所が整備されていないこと、加齢で足腰が弱ってきたこと、テレビ番組で目にした東日本大震災の被害状況などを理由に、南海トラフ地震と津波による被害を強く恐れるインフォーマントがいる。さらに、御畳瀬地区のインフォーマントの中には、災害や防災準備の情報がもたらす息苦しさから逃れるため、自らこうした情報をシャットアウトする人物も見出された。

もちろんこれらインフォーマントの語りを各地区の総意として一般化することはできない。しかし、インフォーマントの中に、過去の高知県内外の災害を「来たるべき災害」として現在より少しだけ先の未来に再配置し、その想像上の災害を「予感」し、時に恐れ、時に侮る心意が生まれつつあると指摘することはできよう。本発表では、これら三地区の語りを手掛かりに、時空間を超えて絶えず再帰する「災害の情報」の特徴を明らかにし、我々がこの不定形な情報と共存するための実践的方策の導出を試みる。